

# ケア実践の現場における「遊び」の意義の問い直しに向けて

—「物語」的自己の生成／再生への関与をめぐって—

長崎女子短期大学 荒木 正平(7846)

キーワード: ケア、遊び、理解

## ○研究目的

認知症高齢者介護の現場において、各主体が日々感受する「違和感」あるいは「居心地の悪さ」

(例) 認知症高齢者→「帰宅願望」として表出する

介護スタッフ→パッシング・ケア(※後述)を用いることへの「ためらい」として感受する

問題意識: この「違和感」「居心地の悪さ」は、どこからくるものなのか

上記の問題意識から、本研究では以下のように目的を設定する。

まず、ケアの実践現場(研究対象は主に認知症当事者としたが、障がい者・児、要保護児童などもその射程にある)における、介護者による、被介護者の「意思の理解」のあり方の現状について考察する。

「意思の理解」に関する検討を踏まえて、被介護者が物語的自己を生成／再生する過程に、介護者等が関与／協働することの必然性とそのリスクについて検討する。

そのことを踏まえたうえで、より望ましい関与／協働(≒ケア)のあり方を構想するにあたり、「遊び」という概念を導入することの意義について確認する。

## ○研究の視点および方法

研究を進めるにあたっての主たる資料は、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)において参与観察を実施することで得られたフィールド・ノートと、グループホームでの介護職員または介護経験者を対象にした、直接面接方式によるインタビュー・データである。それぞれ約1時間半から2時間程度のインタビューを行い、録音した。さらに今回、特別養護老人ホームなど、グループホーム以外の介護現場に関わる介護職員のほか、障害児や要保護児童のケアや保育に関わる職員に対しても、同じ要領でインタビューを実施した(本研究は、主に認知症ケア場面を想定して論を進めているが、広義のケア実践場面においても今後その成果は共有されうると考えている)。

録音内容は、トランスクリプト作業を経て電子データ化した。本稿におけるインタビュー部分の引用はこのデータに拠る。

## ○倫理的配慮

本研究は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規定」を遵守し実施している。

調査協力者に対しては、本調査の趣旨と個人情報取り扱い等について、口頭と文書にて説明を行った。また、個人の特定を避けるため、データに表れる固有名は、介護スタッフについてはアルファベットで表記し、入所高齢者や施設名などは全て仮名表記とした。録音内容は、トランスクリプト作業を経て電子データ化した。本稿におけるインタビュー部分の引用はこのデータに拠る。

## 本稿における「物語」「語り」という語の含意について

- 人の行為は社会的な構成作業と対話を通して作り出される現実のなかで営まれる
- 人は他者とともに作り上げた物語的な現実によって自らの経験に意味とまとまりを与え、そうして構成された現実を通して自らの人生を理解し生きる

(Anderson, H. & Goolishian, H. 1992=1997:62)

- ひとびとの何気ない「語り」のなかにも一片の「物語」が含まれており、また、さまざまな「語り」の断片をつなぎ合わせていくと壮大なひとつの「物語」ができあがることもある。「物語」は「語り」から生まれ、そして成長していく。一方、(略)「語り」は「物語」の延長上に生み出されていく。

(野口 2002:21)

## 「パッシング・ケア」について

- まだ暴露されていないが[暴露されれば]信頼を失うことになる自己についての情報の管理／操作、簡単にいえば<パッシング>(passing)である

(Goffman=1970:81)



- 「「呆けゆくこと」に周囲の者が、まるで本人が「呆け」てはいないかのように振る舞う文脈をつくりだす」ことを前提としたケアである

(出口 2004:166)

# ○研究結果

## 資料1: パッシング・ケアの実践(フィールドノートから)

グループホームにおいて「私はぼけてしまった」などの発言を悲観的な表情で繰り返される利用者に対し、ご本人の記憶に強く残っていると思われる地域のお祭りでの獅子舞のお話を職員が伺ったときの様子である。

最初は職員の促しに素っ気なく応じられる(例えば、獅子舞の色を伺うと「緑と黄色」と答えられる程度)ところから始まった会話であったが、徐々にその口調は熱を帯びはじめる。お祭り見学に行った時に、まだ幼い頃の息子さんが泣き出してしまったエピソードを語る際には、ご自身の歯を剥き出しにして迫ってくる獅子舞の恐ろしさを表情豊かに表現されていた。お話が一段落するころには、ご本人もすっかり落ち着いた様子で笑顔も見られていた。

## パッシング・ケアの有効性とリスクの確認

パッシング・ケアにはやはり一定の有効性があることが確認できた。

→しかしその濫用／ルーティーン化が、認知症高齢者の「語り」から意味を剥ぎ取る装置として作用しうるリスクをはらんでいることも示唆される。

(上記資料1と、次頁資料2も併せて参照のこと。介護職員A氏は、そのリスクに対し十分に意識的であることが、下線部から読み取れる)

→パッシング・ケアと対照的なケアとして、「事実を事実として提示するケア」の存在を確認した。

これらのケア方針の対立こそが、ケア実践に関わる各主体が日々感受する、「違和感」や「居心地の悪さ」に深くかかわっているのではないか。

## 資料2: パッシング・ケアの実践(特養職員へのインタビューデータから)

○インフォーマント: 特養勤務3年目の女性介護職員A氏

○テーマ: 「妄想や見当識障害等のある利用者への対応についてお話を伺った場面」

(※インタビュー(筆者)は以下Iと表記)

A: (認知症のある利用者さんが、A氏のことを) 娘さんって思っったりとか。娘さんの名前ば、なんかそんな感じで話しかけられたら、もう合わせる。

I: 口調とかも?

A: うーん、口調? わりと。うーん、ちょっとやわらぐ程度ですけど。トーンはちょっと変えますね。(略) トーン高めに親しみを込めてる感じ。敬語も、ガッツリ敬語をちょっとやんわり敬語にしたりとか。ちょこちょこふつうにこう、やわらかい言葉でしゃべったりとか、ソフトな感じ

I: そこは、そのままその方(認知症のある利用者)ももう思い込んでる感じ?

A: うんうん。ま、それがいいとかはわからんけど。ま、でも否定は私はしてない。なんかもうほんと一時的な事やけんか。その人にとったらていうか。その場はその、たった5分だけ、娘さんになって。

I: うんうんうん。

A: で、いつきしたら普通に、なんも言わんくなったりとか。

I: ああそう、ずっとじゃない?

A: うん、ずっとじゃないから。それがずっとやったらちょっと、多分、あんまり思い込ませとったらあれなんでしょうけど。ずっとっていう人、今のところおらんけんか。ほんとに認知症の、一時的な妄想、妄想っていうか、感じやけん。一時的には合わせますね、話は。

I: それで、やっぱ落ち着く感じに?

A: うーん。ま、本人が納得たぶんして、くれるとやろうけど。

## 「事実を事実として呈示するケア」とは

認知症の方が、ご自身の思いを文章や口頭で表現したり、他者と語り合うことなどを支援する取り組みであり、認知症である自分自身の現状と向き合うことを求められる（あるいはよしとされる）ことが多い。その意味で、パッシング・ケアとは対照的なケアのあり方として把握することができる。そこでは当然、認知症当事者を支援するスタッフが、本人の自己開示をサポートする必要がある（ケアする／されるの関係にあるとは、ある側面ではその絶対的な非対称性が不可避であることを意味している）。

ただし、そのような形で認知症当事者の「自己」あるいは「自我」が表出されることのリスクについては、以下のような指摘もなされている。

- スタッフが「補助自我」になるというのは、認知症から距離を取った正常の自我意識を意味してはいないだろうか。

（西川 2007:112）

- そこから紡がれる「語り／物語」は、体裁としては被介護者が主体である。しかし、実質的には、被介護者は、介護者側の論理の枠組みからの逸脱は許されていないのではないか。
- とはいえ、認知症当事者の「自己」を表出するためには、そのような形での支援は不可欠であり、「ここからここまでは完全に独立した認知症当事者の自己である」などということも、「ここからここまでは完全に彼自身の意思である」などと確定することも、現実的には不可能である。
- では、認知症当事者自身の思いを「理解」するにはどうすべきか。それは可能なのか。

## ○考察

### 介護の現場で求められる「理解」について

介護の現場では、なかば当然の前提として、利用者についての「理解」を深めることが求められる。利用者理解を深めることで、介護の質は向上し、QOLも向上させることができ、ケアの実践現場も快適になるとされている。

→「理解」を深めることは確かに必要である。だがそれで十分かの問い直しが必要。

→そもそも、「理解」を深めるベクトルのみで進められる介護実践にこそ、「違和感」の原因があったのではないか。

### 「理解」をめぐる二つの基準

- 原理的な「完全な理解」を、誤って実践的な「適切な理解」とするとき、私たちはいつも「理解の過少」だけを発見し、「理解の過剰」は絶対に発見できない

(奥村 1998:246)

→原理的基準としての「完全な理解」と、実践的基準としての「適切な理解」。「理解」をめぐるこのふたつの基準は、まったく異なるものである。「完全な理解」を求めるあまり、「わかられすぎる」苦しみを他者(被介護者)に与えることへの配慮が、介護者には求められるのではないか。

→このことは、「介護職間における過度な競争意識と重圧感によるバーンアウト」(出来るはずがない「完全な理解」を求めることに起因する、不可避の「不安全感」)や、「家族介護者へ向けられる過剰な」期待によるストレスの発生にもつながっていると考えられる。

## パッシング・ケア概念の可能性の拡張

完全な利用者理解をこそ最善の状態と定め、そこへの接近の程度によって介護の質を判定するようなベクトルでの努力のみをケア実践者に要請することには、やはり無理があり、破綻するリスクが高い。あるいは実際には破綻していることに気付かれないまま、ケアに関わる当事者の誰かが犠牲になり続ける。そのような事態を避けるために、再びパッシング・ケアの可能性の拡張を検討したい。以下の西川による指摘は示唆的である。

- ・ 認知症ケアにおいて重要なのは、相手に問題を直視させることや、問題を解決させることではなく、認知症が問題となる場から、すり抜けること
- ・ passingには形容詞としての「はずみの、ふとした、偶然の」という意味もあり、(略)これらの意味が認知症ケアにおいてはもっと注目されるべきだ

(西川 2007:113)

パッシング (passing) という語の含意にある、「はずみ」や「偶然」によって発生するような思いがけない事態や言動への遭遇は、認知症ケア実践に限らず、あらゆるコミュニケーション場面において発生しうる。そのような「出会い」を、よりポジティブに(少なくとも「居心地の悪いもの」としてではなく)意味づけることが可能になるか否かは、その場に、「遊び」が介在する余地があるか否かに大きく左右されるだろう。

例えば先に挙げた資料2は、認知症のある利用者がAさんのことを自分の娘だと思い込んでいるようなケースであるが、そこでAさんは彼女自身の〈現実世界〉を離れて、利用者の生きる〈物語世界〉を一時的に共有することで、利用者は落ち着きを取り戻されている。ここでAさんが行っている対応は、どのような意味を有するのであろうか。



## ケア実践場面における「遊び」を導入することの意義

取り上げたAさんの対応は、利用者の世界で「遊んでいる」とも捉えられる。実はこのような対応を行っているのはAさんに限られず、むしろ認知症ケアの現場においてはそれほど珍しいものではない。インタビューを実施する中で、そのような実践を行っているケースは複数確認された。しかしその実践は、実は非常に創造的であり、自己のあり方や対人関係、また世界の意味を同時に変容させうるものでもあるとされる。

- ・ 私と相手が空想世界を共有しているときにのみ、相手の言葉が意味を持ち私の変容を促す。私の可能性の地平に含まれない意味が私に到来し、私の知覚的空想の世界に組み込まれる。こうして私の可能性の地平が変容する。

(村上 2010:107)

そしてそのような、「遊び」の有する創造性による現実変容の可能性が及ぶのは、認知症ケアの場面に限られたものではない。子ども達や障がい児者の行うごっこ遊びとの共通性も指摘されている。

- ・ ごっこ遊びの創造性と認知症の人たちの物語世界を共有する時の創造性とはどこか共通するものがあるように思う。

(六車 2015:252)

最後に「遊び」という語には、文字通りの「あそぶこと」や「遊戯」といった意味のほかに、「ゆとり」や「余裕」といった意味も有していることを確認しておきたい。ケア実践の現場に、後者の意味での遊びが存在しないことで、前者の意味での遊びの意義もまた、もたらすことが困難となるのである。

## 参考文献

- Anderson, H. & Goolishian, H. (1992) The Client is the Expert: A not-knowing approach to therapy. In McNamee, S. & Gergen, K. J. eds. (=1997,「クライアントこそ専門家である」野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー: 社会構成主義の実践』金剛出版, 59-88.)
- 出口泰靖 (2004) 「『呆け』たら私はどうなるのか? 何を思うのか?」 山田富秋編著 『老いと障害の質的社会学——フィールドワークから』 世界思想社, 155-183.
- Goffman, E. (1963) Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity: Prentice-Hall. (=1970, 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- 木下衆 (2015) 「誰が、認知症患者の人生を知っているのか?」 『現代思想』43(6), 192-203.
- 六車由実 (2015) 『介護民俗学へようこそ 「すまいるほーむ」の物語』新潮社.
- 村上靖彦(2010)「創造性と知覚的空想--フッサールとウィニコットを巡って」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』36, 99-116.
- 西川勝 (2007) 『ためらいの看護 臨床日誌から』 岩波書店.
- 野口裕二 (2002) 『物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ』 医学書院.
- 奥村隆 (1998) 『他者という技法——コミュニケーションの社会学』 日本評論社.